

## 生化学若い研究者の会「第58回生命科学夏の学校」開催報告

橋本 崇志<sup>1</sup>, 落合 佳樹<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>第58回生命科学夏の学校実行委員長 京都大学, <sup>2</sup>事務局長 埼玉大学)

「生化学若い研究者の会」は、日本生化学会後援のもと、生命科学分野の研究に携わる大学院生を中心に構成されています。当会は本年で設立60周年を迎え、次の3点を軸に活動しています。一つ目は北海道から九州までの八つの地域でセミナーなどを企画する「支部活動」、二つ目はライフサイエンス誌へのコラム連載などを行う「キュベット委員会」、そして三つ目が年に一度開催される滞在型研究交流会である「生命科学夏の学校」です。

本年度は、8月31日から9月2日にかけて足和田ホテル（山梨県南都留郡）にて「第58回生命科学夏の学校（以下、夏の学校）」を開催しました。本年の夏の学校には、全国から115名（内、講演者9名）の若手研究者が集いました。

### 「第58回生命科学夏の学校」企画趣旨

平成最後の開催となった本年度は、「一生モノの〇〇を持ち帰ろう！」をキャッチフレーズに掲げました。夏の学校には、同世代の若手研究者との交流、各分野を代表する講師のご講演、日頃の研究生活では関わらないような研究分野との出会い……など、様々な可能性が広がっています。

そこで、ただ会期中に満足してもらうだけではなく、その後の研究者人生にも影響を与える“〇〇”を得てほしい！という思いを込めて、本年度の夏の学校を開催しました。

### ワークショップ

夏の学校のメインイベントであるワークショップでは、計6名の先生方にご講演いただきました。神経科学や腸内

細菌といった近年ホットなテーマに加えて、生態学や昆虫学といった日頃触れる機会の少ないテーマや多くの若手研究者の悩みの一つであるキャリアパスなど、多様性に富んだワークショップを企画しました。

また、公共データベースを扱うハンズオン実習も行い、参加者のニーズに合わせた知識や技術を身につける場を提供しました。

### シンポジウム

本年度のシンポジウムでは、生命科学の研究史を振り返るとともに現在の最新技術に着目することで、生命科学が今後どのように発展していくのかについて参加者自身で考えることを目的としました。

第一部では、3名の先生方に生命科学のこれまでの歩みや現在の最先端技術についてご講演いただきました。時代の流れに伴う研究テーマの変遷や、技術の進展により新たな研究分野が切り開かれる様を知ることで、どのように研究が発展していくのかについて示唆を得られるご講演でした。

第二部では、生命科学が今後どのように発展していくのかをグループワーク形式で議論しました。既存技術の組み合わせが持つ可能性を実感する意見や、突飛なお題に対し斬新な切り口を考案したグループもありました。また、先生方からの鋭いフィードバックに一同がはっとする場面もありました。

第一部と第二部を通じて、今の生命科学研究がもつ未来への可能性を楽しく真剣に考えることができたようでした。



写真1 ワークショップ



写真2 シンポジウム



写真3 ポスターセッション



写真4 集合写真

### 研究交流企画

新たな知識を得られるだけでなく、同世代の研究者とのネットワークを構築できることも夏の学校の魅力の一つです。そこで、参加者の交流を図るために、「研究交流会」、「自由集会」、「ポスターセッション」を企画しました。

1日目夜に行った「研究交流会」では、自己紹介を交えながら、各々の研究内容を紹介しました。趣味の話題から研究内容まで、初対面の人とも気軽に交流できる場を提供しました。

2日目夜に行った「自由集会」では、参加者が自由に議題を持ち込み、討論する場を設けました。「研究室を変更した理由は何か」のような研究生活に関する議題から、「ポケモンを生命科学的に考察しよう」、「若手研究者同士が交流することの意義を考えよう」といった夏の学校ならではの議題まで、幅広いテーマが集まりました。ふだん研究室では話せないような悩みを共有することで、参加者同士の繋がりも深まったようでした。各日とも企画終了後には懇親会が行われ、講師の先生方も交えて夜遅くまで大いに盛り上がりました。

最終日に行ったポスターセッションでは、多様な参加者が集まる夏の学校らしく様々な研究分野の研究発表が行わ

れました。データ解析手法や実験手法などについての詳細な質疑応答もあり、意見交換が活発に行われました。

### 「夏の学校」から日頃の研究生生活へ

夏の学校では、日頃の研究生生活では得られないような“〇〇”を習得するチャンスがたくさん広がっています。本年度の夏の学校においても、ワークショップにおける新たな知見や研究手法の習得、シンポジウムにおける多角的な視点からの討論、そして研究交流企画における同世代の若手研究者との出会いがありました。キャッチフレーズの通り、今後の研究生生活でも活かせる“〇〇”が提供できたのではないかと考えています。来年度の夏学にて、お互いに成長した姿を見せられることを期待しています。

最後に、本年度の夏の学校の開催にあたり多大なご支援を賜りました、日本生化学会をはじめとする法人・企業の皆様、ご講演いただきました先生方に心より御礼申し上げます。

(生化学若い研究者の会・第58回生命科学夏の学校についてはこちら：<http://www.seikawakate.org>)